

姫沙羅の花

小林まもる

孫娘の誕生を記念して
昨年移植した初めての姫沙羅だったが
干からびて音なしの春だった

眠りたいたけ眠り 遅れてくればいい

連休明けには か細い枝先の鞘を
無数の銀色に輝かせ 殻を割って
一斉に芽吹いてきた

再生はつねに辛苦と連れ立ち 劇的だ

地に落ちきれなかった黒褐色の花か実か
人の目の高さの斜め上は死角になる
小枝にはさまれていたのは青蛙のミイラ
忘れ去られた百舌の速贅か

名付ければ 木枯らしの河童にもなる

やがて何事もなく夏が来て
姫沙羅は小さな夏椿のような白い花を
今季限りと枝一面に戦がせようが

類音に耳を立てれば 姫修羅の花

孫娘の行く末を見ていたのかもしれない
冬にも咲くことのある
もう一つの気がかりな花と
それが背中合わせではないかと